

らいいプラス

ボウリングやトライアスロン、ビールパーティー……。楽しみながら寄付ができる仕組みが相次いで登場し、20〜30代の若者が熱い視線を送っている。自分の成長につながったり、交流の輪が広がったりする点に魅力を感じているようだ。照れくさそうでも、さらなる寄付や社会貢献活動への入り口ともなりそうだ。

「スベア取れますよ」「絶対に倒したい」。3月中旬の土曜日、東京都港区のボウリング場で32人が3ゲームを楽しんだ。一見すると普通の大会だが、会場内には発展途上国の子どもたちの写真が置かれる。終了後、「本日はスリランカでの食事160人分になりました」と発表されると拍手がわき起こった。

体動かし気軽に

この大会では1人につき150円が途上国支援をする特



寄付 楽しみたい!

イベント型、若者とらえる

友人らを誘いやすく

法人メタボランティア(東京都世田谷区)の河野誠二代表(38)は「運動もできて社会貢献にもなる、そんな両得の仕組みを作った」と思いを話す。

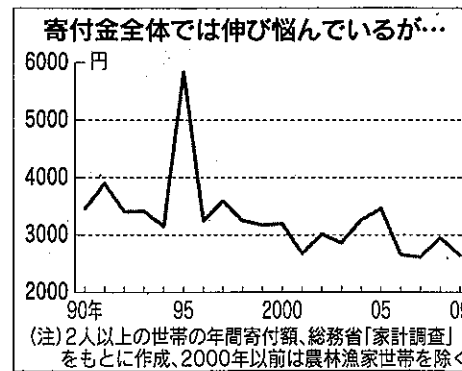
「1人で努力するのは難しくても、寄付という応援があればがんばれる」。東京の会社役員、小原壮太郎さん(36)は10年末、過酷なトライアスロンのレースに出場する。ただ完走を目指すだけではない。インターネット上で、挑戦する自分への賛同を求め、非営利団体への寄付を呼びかけている。トレーニング成果

次長は「寄付をしたい若者は一定数いるが、収入も少ないため慎重になりがち。資金使途をはっきり伝え、友人と参加できるようにするなどの工夫が求められる」と述べる。

パーティー開く

寄付のために、チャリティパーティーを開く人も目立つ。慈善活動を前面に出すと「かっこつけている」と敬遠する若者もいる。パーティーの楽しさという要素がそれをうまく中和するようだ。

「寄付をして」と言われるのが引けるけど、イベントに来てね」と誘いやすく照れたい団体や活動内容を探し、クレジットカードなどで寄付することができ、定期的な寄付者では、20〜30代が半分以上を占める。



全体として見ると、寄付を取り巻く状況は厳しい。家計調査でも世帯当たり寄付額は伸び悩んでいる。公共経済学に詳しい大阪大学大学院の山内直人教授は「寄付や募金に重要な役割を果たしてきた自治会などの地縁組織は弱体化した。ネットなどを使って社会貢献への関心を高めることが大切」と語る。

関心高める工夫大切

たい団体や活動内容を探し、クレジットカードなどで寄付することができ、定期的な寄付者では、20〜30代が半分以上を占める。NPO法人のワールド・ビジョン・ジャパン(東京都新宿区)では、途上国支援のため毎月4500円を寄付する支援者を募集している。09年9月期は約27億円が集まり、前年同期よりも2割増えた。ネット上の広告などに反響があったといい、支援者の3割強が20〜30代だ。

いへん何でも毎週苦手なシユンギクが届くのは困ります。先日書いたわがままな嘆きを讀んだ友人からメールが届きました。20年前に留学した中国の大学寮は、まさに旬のものばかりで大変だったそうです。トマトが盛りの5月のある晩は、トマトサラダにトマトスープ、メインも大きな輪切りのトマトソテー。さすがに箸(はし)が動かなかったとか。旬を味わうといえは聞こえはよいけれど、毎日の献立作りは簡単ではありません。それを工夫して、楽しんで暮らす努力が生活の知恵を生むのだでしょう。

温故知新の「イコライフ」

佐光 紀子



わったことがあります。2日連続して同じ食材を出す。家族から「イコライフ」が出るよつじや、まだまだ修業がたりません。今回も私のために、たくさんさんの知恵を貸していただき、本当にありがとうございます。パゲティというアイデアに

サンキュー

はビックリしました。「いろいろな食べ方があるのね」と感心する私に「納豆のスパゲティもおいしいし、意外にあつかもね」と子どもたち。シユンギクは見るのもイヤだ、なんて思っていたのがうそのよう。今は早く来年にならないかな、いっそ時期外れでもシユンギクが届けばいいのになんて考えているので、すからいっしょに悩む。紙面を通じてみなさんからいただいた知恵は、独り占めしないで分かち合いたい。そう思いながらコラムを書いてきました。ミンサーで大豆をつぶす「豆を学んだ時も、友人から」記事を読んで買ったわ」といわれたり、近所のママ友から「ちょっと貸してあげる。」(ナチュラライフ研究家)おわり